

彩釉磁器

彩釉は、陶芸家・三代目徳田八十吉（1933-2009）が考案した現代釉薬の技法で、色鮮やかな釉薬が溶けて細かいグラデーションを描くのが特徴である。1997 年に重要無形文化財に指定された。

三代目徳田八十吉は石川県小松市の九谷焼の名家に生まれた。祖父は、初代徳田八十吉（1873-1956）。初代八十吉は、17 世紀の古九谷の釉薬を改良（古い作品を研究して技術を復元）したことで知られている。また独自の色彩を数多く生み出している。三代目八十吉も同様の釉薬を得意とし、若干 22 歳で日本美術展覧会に初入選を果たしている。

三代目八十吉は、古九谷の青手の上絵付に特に関心を寄せていた。このスタイルは、赤を使わず、緑、黄、紫、紺などの濃い釉薬を使うのが特徴だ。三代目八十吉は、この釉薬を現代的な美学で表現することを試みていた。そして、通常よりも高い温度で焼成したところ、釉薬がビスクと融合するだけでなく、互いに溶け合い、オーロラや超新星に例えられるような霞がかかった色のスペクトルになることを、偶然にも発見したのである。八十吉は、このような流動的で幻想的なグラデーションを、彩釉と名付けた。

彩釉は、九谷焼の原点である伝統的な釉薬の配合に基づきながら、伝統的な形やモチーフから大きく逸脱した、九谷焼の中でも突出した存在である。石川県立美術館には、三代目八十吉の特徴的な彩釉作品 9 点が収蔵されており、彼の現代的な感性と斬新な表現の幅を見ることができる。

1997 年、八十吉の功績が評価され、彩釉はまったく新しい重要無形文化財に指定された。同年、彩釉の保存と普及を目的として重要無形文化財の保持者に認定された。三代目八十吉は 2009 年に死去したが、彩釉の技術を長女に伝え、長女が四代目八十吉（1961-）を襲名した。